

福岡市
シタノマエ
有田七田前遺跡

—有住小学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第95集

1983

福岡市教育委員会

福岡市

有田七田前遺跡

—有住小学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告—

1983

福岡市教育委員会

序 文

福岡市西区有田地区に小学校が新設されることになり、福岡市教育委員会では埋蔵文化財の事前調査を昭和56年8月から11月にかけて実施しました。

本書はその成果を収録したものです。報告書に見られるように縄文時代晚期の夜臼式土器の中に朝鮮半島の無文土器が検出されたことは稻作開始の新しい様相を示す資料として注目を集めました。

発掘調査から資料整理に至るまでの多くの人々の御協力に対し心から感謝の意を表します。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり合せて研究資料の1つとして活用いただければ幸いです。

昭和58年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

本文目次

Iはじめに	
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
3 試掘調査	2
I 遺跡の立地と周辺の遺跡	4
II 調査の記録	
1 発掘区の設定	6
2 層位・遺物出土状況	6
3 川状遺構	9
4 出土土器	13
5 土製品	29
6 出土石器	30
おわりに	38

挿図目次

第1図 試掘調査土層模式図	2	第16図 出土土器実測図（9）	23
第2図 周辺の遺跡	3	第17図 出土土器実測図（10）	24
第3図 有田七田前遺跡全体図	5	第18図 出土土器実測図（11）	25
第4図 遺物出土状況実測図	7～8	第19図 山土土器実測図（12）	26
第5図 調査区南壁土層図	9	第20図 出土土器実測図（13）	27
第6図 調査風景	9	第21図 出土土器実測図（14）	28
第7図 川状遺構実測図	10	第22図 出土土製品実測図	29
第8図 山土土器実測図（1）	15	第23図 出土石器実測図（1）	31
第9図 出土土器実測図（2）	16	第24図 出土石器実測図（2）	32
第10図 出土土器実測図（3）	17	第25図 出土石器実測図（3）	33
第11図 出土土器実測図（4）	18	第26図 出土石器実測図（4）	34
第12図 出土土器実測図（5）	19	第27図 出土石器実測図（5）	35
第13図 出土土器実測図（6）	20	表 出土石器一覧表	36
第14図 出土土器実測図（7）	21		
第15図 出土土器実測図（8）	22		

図版目次

- 図版1 1. 遺跡遠影 2. 調査区全景
図版2 1. 遺物出土状況（B区） 2. 遺物出土状況（B区）
図版3 1. 調査区南側土層 2. 1と同じ
図版4 1. 遺物出土状況（A区） 2. A区川検出状況
図版5 1. A区川検出状況 2. B区川検出状況
図版6 壺形土器
図版7 壺形土器
図版8 壺形土器
図版9 壺形土器・壺形土器
図版10 壺形土器
図版11 鉢形土器
図版12 鉢形土器
図版13 鉢形土器・紡錘車
図版14 石器

例　　言

1. 本報告書は、福岡市教育委員会が有住小学校建設に伴って調査を行った有田七田前遺跡の報告である。調査は昭和56年8月16日～9月23日まで実施した。

2. 本報告は、有田・小田部遺跡の第62次調査とする。

3. 本書の執筆はⅠ-4、5・土器を山崎純男、Ⅰ-6・石器を山口謙治が担当し、他は松村が行った。

4. 遺物の実測は、土器を山崎純男・木下尚子・田崎博之、石器を山口謙治が行った。

5. 本書に掲載した写真は松村が行った。

I はじめに

1 調査に至る経過

福岡市の人口増加の波はとどまるところを知らず、旧西区はその中でも著しく、3区に分割されたほどである。団地、個人住宅の建設が児童、生徒数の増大を呼び、学校のマンモス化に拍車をかけ、学校の新設が急務となっている。有田校区でも例外ではなく、早良区大字有田に小学校建設の計画がなされ、教育委員会施設部より埋蔵文化財の事前の確認がなされた。市域内の遺跡分布地図には遺跡の範囲として記載はないが、隣接する有田遺跡群の周辺部であり、広大な面積(17500m²)であることから試掘調査を実施した。試掘調査は1981年1月下旬に行ない、その結果、運動場予定地の南東隅に夜臼式土器の包含層が確認された。遺跡が運動場内に位置することから盛土を約1.5m行なうことで将来的に、遺跡が保存されるので、今回調査を実施しなくとも良いのではないかと検討されたが、外堀等で破壊される部分や、低湿地があるので暗渠排水用の溝を開けるとのことで調査を実施することになった。

2 調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会

調査委託 福岡市教育委員会施設部

調査担当 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第一係

事務担当 三宅安吉(現福岡市埋蔵文化財センター所長) 柳田純孝(埋蔵文化財第一係長)

古藤国生

発掘担当 飛高憲雄(福岡市埋蔵文化財センター) 松村道博

発掘補助 岡部裕俊(同志社大学)

整理補助 岡部裕俊

整理作業、出土遺物について山崎純男(文化課)、山口讓治(福岡市埋蔵文化財センター)の多大な協力を得た。

調査協力者 海津静枝 清水文代 横濱恵美子 藤タケ 米倉ハツネ 倉光三保 倉光ユキエ 石橋輝枝 新町ナツ子 山口富子 繁方マサヨ 伊場秀子 柴田春代 柴田勝子 柴田タツ子 後藤ミサヲ 林久子 浅見秀子 平井和子 宮原邦江 中川保子 石橋信子 原幸子

3 試掘調査

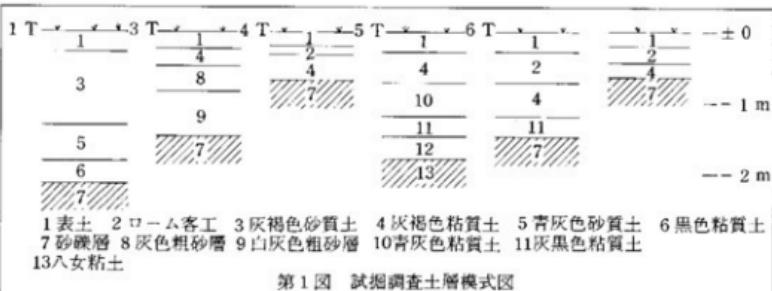
試掘調査は1980年1月23、24、26日の3日間実施した。計7本の試掘溝により遺構、遺物の観察により調査範囲を決定した。以下、「試掘調査報告」により要約する。

1月23日 南側台地部分の長軸に沿って2本のトレンチ（第1、第2）を入れた。第1、2トレンチとも敷地の東端部分で八女粘土の台地縁を検出した。これは略南北にのびるようである。しかし台地上には包含層はのらず、台地の落ち縁部分約10m幅をもって50~60cmの厚さで認められるが、それほど多量の様子はない。上器の構成は夜臼式土器で丹塗壺、鉢などの研磨土器が多い。特に南側の第2トレンチ内で多量である。

1月26日 南側台地部分以外の対象地に5本のトレンチ（第3~7）を入れたが全体的に低く、土層堆積も旧室見川の氾濫原の様相を呈していた。

従って申請地17500m²の内、前記南台地部分約600m²に本調査を限定でき、調査期間は約1.5ヶ月を要する。

* 以上のように試掘調査報告では包含層の部分だけを調査範囲としていたが、台地部分にも遺構が遺存している可能性も残されていることから、本調査ではこの台地部分も調査範囲として加え、約1200m²の面積の調査を実施した。第1図は試掘調査時の土層模式図である。本調査時には、すでに校舎建設工事に着手していたので、未調査区の状況を把握できないので、その理解のため図示した。各トレンチで疊層、八女粘土層に起状があり、ただ単に氾濫原として考えることはできない。



- 1 田村遺跡 2 四箇遺跡 3 次郎丸高石遺跡 4 鶴町遺跡 5 有田七
田前遺跡 6 原談義遺跡 7 原深町遺跡 8 飯盛向江遺跡 9 有田小田部遺
跡 10 橋本櫻田遺跡 11 飯盛遺跡群 12 戸切遺跡 13 牟多田遺跡 14
下山門ツイジ遺跡 15 十郎川遺跡



II 遺跡の立地と環境

有田七田前遺跡は福岡市早良区大字有田字七田前にあり、室見川により形成された早良平野のほぼ中央部に位置し、有田・小田部遺跡のある洪積台地の南西部にあたる。室見川の東約500m、標高約7.5mを測る。有田台地は31街区から南へ三角形状に延び、県立西福岡高校近くまで延びていると推定されている。その裾部の標高は8.5~9mの等高線に添っている。有田七田前遺跡は、その台地の推定線より西へ200m寄った地点で、標高7.5mの平坦な田圃となっている。周辺部はほとんど家屋が建ち旧状を損っているが、西北部の室見団地、南西部の有田団地等の西側部分は室見川の氾濫原と考えられている。遺跡の東側は民家が建ち、水田面より一段高くなっている。さらにその東側は開発行為に伴う試掘調査で、八女粘土の台地が少しづつ低くなっている。以上のような周辺の状況により有田七田前遺跡は有田台地と連続する台地の南西縁部に位置するものと推定される。

周辺の夜臼式土器を出土する遺跡は多数存在している。1966年の有田遺跡^{註1}の発掘調査を始めとして、牟多田遺跡^{註2}、鶴町遺跡^{註3}、原談義遺跡^{註4}、拾六町ツイジ遺跡^{註5}、十郎川遺跡^{註6}等があげられる。有田遺跡の調査は標高16mの台地上の一部の調査であるが、夜臼式土器と板付I式土器が共伴して出土している。牟多田遺跡は標高6m前後の包含層である。鶴町遺跡は標高約10.5mで、洪積台地にあり、幅約8mの大溝から夜臼、板付I式土器の出土が知られる。器種は壺形土器と壺形土器で、鉢形土器の検出は知られていない。拾六町ツイジ遺跡は標高5mの沖積地に径2mを測る不整形土括が検出され、夜臼、板付I式土器と共に諸手鍤の未製品を始めとする木製品が多く出土している。十郎川遺跡は標高3m前後の冲積微高地上に土器包含層が認められ、多数の夜臼式土器が検出され良好な資料を提供している。

早良平野の近年の調査は台地から冲積地へと括り、多数の夜臼期の遺跡が調査されているが、まだ初期水田址の検出には至っていない。近い将来、初期水田地が発見されるであろう。

註1 「有田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告第4集 1964年

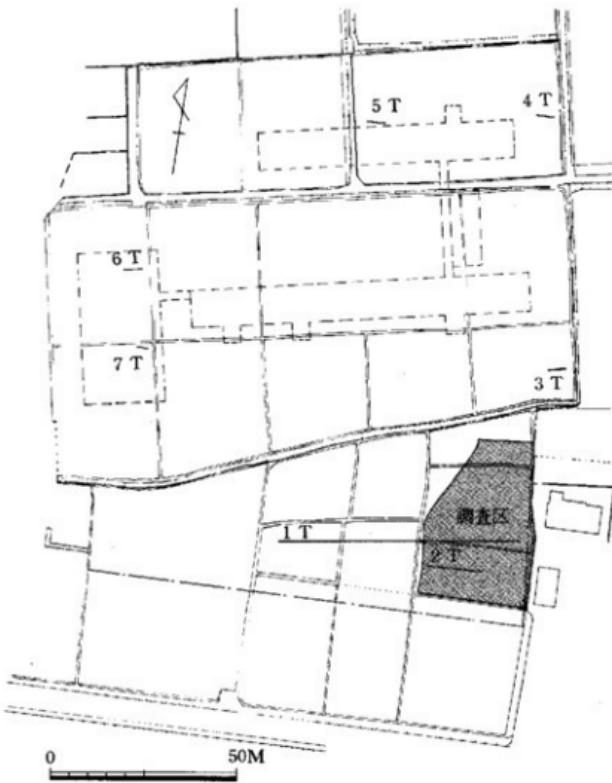
註2 「牟多田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告第29集 1974年

註3 「鶴町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告第37集 1976年

註4 1975年福岡市教育委員会調査

註5 「下山門ツイジ遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告第92集 1983年

註6 「十郎川」日本住宅都市整備公團 1981年



第3図 有田七田前遺跡全体図

III 調査の記録

1 発掘区の設定

調査範囲は試掘調査により、学校建設敷地17500m²の中、約600m²と決定されていた。その周辺部は埋土され、校舎建設工事も併行して行なわれ、なおかつ、南側の田圃は境界を越して稲の作付が行なわれていたため、敷地境界より2m程内側までしか調査を実施することができなかつた。台地部分には包含層はないとの試掘結果を得ていたが、遺構の存在も否定できなかつたので、調査範囲として加え、約1200m²を調査対象面積とした。

発掘の方法 発掘区は南北隅を基点にし、一辺10mの方眼を組み、東から西へA 1区～A 3区、南から北へA 1区～E 1区とした。調査は期間等の関係から重機を用いて包含層直上まで除去し、その後序々に遺物検出を行なった。出土遺物は物原のように、重複して重なり合っており、一時期に投棄されている状況を示したので、土器個々に番号を付して取り上げることは実施しなかった。ただ一辺10mの発掘区を1mの方眼で区切り南東部を1とし、西に向って2～10とし、さらに東端へ返り11に…とし、層位、発掘区を加え取り上げた。例えばA 2区で示せばA 2・21 V層となる。

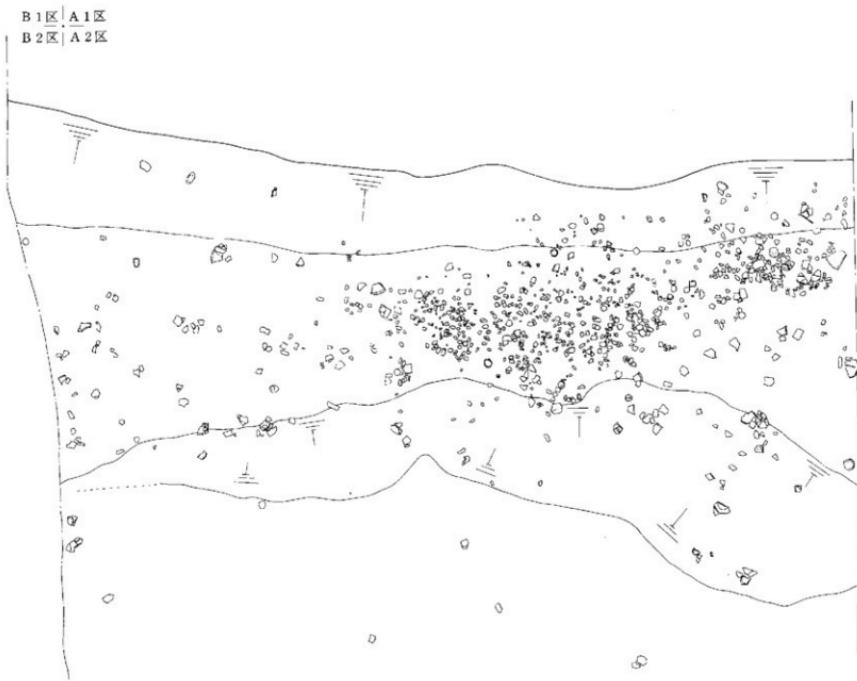
2 層位・遺物出土状況

層位(第5図) 発掘区の南端が遺物出土も多く、包含層の状況も良好で、他の区域もほぼ同様の層序を示すので、その上層について記したい。

1層—現在の水田耕作土で厚さ5～10m。

2層—黄褐色上で田圃の床土。厚さ約5cm。

3層—灰褐色～暗褐色土である。少し粘質を有する。砂、礫等は含まない。この層は包含層の上面に堆積し、鳥栖ローム上面にものる。2層に細分でき、上層の灰褐色土は途中から現われ、西に向いしだいに厚さを増す。その境界線は漸移的で同一層として把えた。東部の台地上に認められる土層堆積はこの3層までで、わざかに西へ傾斜した堆積状況を示す。4層以下は鳥栖ローム台地の段落ち縁から始まり、東から西へゆるやかな傾斜を示す。4層は黄褐色砂質土で織籠状の鉄分沈殿が多く認められる。5層は灰黄色砂質土で土器包含層である。色調の差異で3層に細分でき灰黃白～灰白色土を呈する。土器は①、②に多く含まれ、③は少なくなる。同一破片が②から①へ連なって出土していること、上質もほぼ同一であることから同一層として考えた。③は細砂が多くなり、砂層となるが、部分的にしか存在せず、全体的な広がりも一つと考えられないで5層の中で把えた。②、③は幅3～4mで厚さ20～30cmのレンズ状地盤であり、連続する層ではない。6、7、8層は鳥栖ローム、八女粘土と砂層の混合土である。台地縁から西へ斜方向に堆積している。9層は灰白色粗砂層で一時期の堆積と考えられる。少



量の土器を含む。中央部が厚く、約70cmの厚さになり、両側が薄くなりレンズ状となる。10層はその下にあり9層とほぼ同一の堆積状況を示す。少量の土器が出土している。11層は9層によって切られ、その西側に厚さ約30cmで続く。鉄分が多く沈殿する灰黃白色微砂層である。12~14層も9~10層により切られる砂層である。12は東から西へ傾斜する黃褐色砂層の縞状文様が認められる。13層は暗褐色砂質土で木葉、枝、種子の植物遺体が出土している。流れのゆるやかな時の堆積であろう。14層は9層と同質の粗砂層で黃褐色を呈する。台地部分は鳥栖ローム層が60cmの厚さであり、続いて21cmの厚さの八女粘土層が堆積し、疊層となる。

遺物出土状況（第4図）

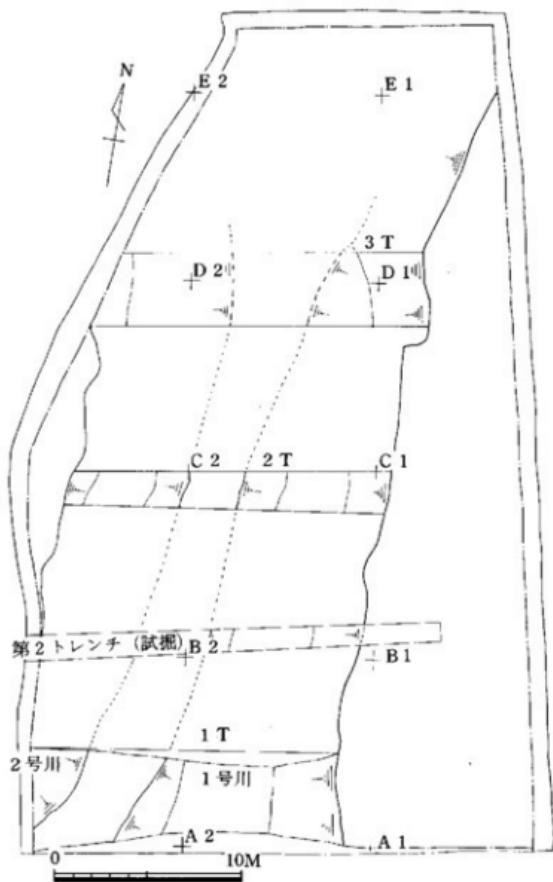
出土遺物は土器、土製品、石製品が認められ、それらが混在して出土し、土器は大部分が夜臼式土器で占られ、板付1式土器は数片である。調査区の東側は大部分が洪積台地で、発掘区の南側中央部から北東方向に弧状に延び、遺物はその台地縁にそって河状遺構埋没後の粗砂上の砂質土層の中から帶状に検出され、幅4m、長さ24m、厚さ20~30cmにわたって堆積している。



第6図 調査風景



第5図 調査南壁土層図 ($S = \%$)



第7図 川状遺跡実測図

台地部分は標高約7.5mを測る平坦地であるが、本来の形状は、小丘陵で、それを削平したものであろう。そのため台地落ち縁の遺物出土量に比較して、遺構が存在しないものであろう。出土遺物は台地に近い位置のものが高く、西へ傾斜をもって検出されている。土器は壺形土器一点（第18図5）を除いて他は全部が破片として出土している。完全な形態の土器が押しつぶされた状態や故意に破壊し投棄した状況とは考えられない。石器、土製品も一ヶ所に集中する傾向も認められない。

調査区全域では遺物の出土に粗密がかなり認められるが、大まかに試掘トレンチを境として南（A2区）、北（B2区）2ヶ所に大別して、その集中がみられる。A区は調査区の南側にさらに続いている。土器の最も多く出土しているのは台地縁から約1m離った所で西へいくに従い減少する傾向を示す。またこの部分はわずかに溝状に窪んだ状況を呈するが、明確な溝とは言えない。

3 川状遺溝（第7図）

大、小の二本の平行な川状遺構が包含層の下部より検出された。いずれも疊層を切り込んで形成されている。西側部分が未調査なのでその状況が不明であるので、明確な解答は得られない。あるいは、1、2号川状遺溝が一つの幅広い河になる可能性もある。また、調査期間等の関係で三本のトレンチ調査があるので、判断に迷う。いずれも形態、土層堆積状況から人工的工作物ではなく、自然の所産であろう。

1号川 南端で最大幅を有し12.3m、深さ約140cmを測る。東壁の傾斜は急峻であるが、西側はゆるやかで、その比高差は0.7mにすぎない。北側へ向って序々に幅を狭め、床面も少しずつ高くなり3Tで終息する。床面の高さは1Tと3Tでは約0.5mあり、北側から南へ傾斜する。

2号川 1Tでは東側の肩部、3Tでは東側の肩部は不明瞭で、西側は調査区外に延びている。2Tによりその形態を観察すると、幅約4.7m、深さ約1mを測る。壁面は両側ともゆるやかである。床の高さはほぼ同じである。

(松村)

4 出土土器

本遺跡より出土した土器の量はきわめて多量で、全てが突帯文土器単純期にあたる良好な資料である。しかし、紙面の都合上、全てをとうてい収録できないので、本報告書では代表的な土器について記述し、本書に収録できない他の土器について、あるいは土器構成上の問題については今後さらに鋭意・整理につとめ再報告したいと思う。

出土土器には壺形土器Ⅰ類—底部から内傾しながらあがる壺形の器形をなすもので口縁部に一条（まれに二条）の刻目突帯をめぐらす土器、壺形土器Ⅱ類—I類と同様の器形を有する。口縁部の刻目突帯ではなく、口唇部に直接刻目を入れる土器、壺形土器Ⅲ類—I・II類と同様の器形をなし、口縁部に刻目突帯あるいは直接の刻目をもたない土器、壺形土器Ⅳ類—胴部上半で「く」の字に内側に屈曲する壺形の器形で、口縁部と胴部の屈曲部に刻目突帯を貼りつける土器、鉢形土器Ⅰ類（浅鉢形土器）—黒色磨研土器が多い。基本形は縄文時代晩期中頃の浅鉢形土器の系統をひく。細分が可能であるが一括する。鉢形土器Ⅱ類（鉢形土器）—器形に大小の差があるが一括する。基本形は晩期中頃の系統をひく。数量的に少ない、高杯形土器—浅鉢形土器の底部に低い脚を付したもので、量的には少ない、壺形土器Ⅰ類—底部は丸底に近い平底か安定した平底を有し、胴部は球形かやや細長い球形をなし、肩部に段ないし沈線をめぐらす、頸部は内傾しながらあがり、口縁部でやや反転する器形。小型品（15cm未満）をI類とする。壺形土器Ⅱ類—器形はI類と同様で、中型品（器高30cm未満）をII類とする。壺形土器Ⅲ類—器形はI・II類と同様で、大型品（器高30cm以上）をIII類とする。若干の他地域の搬入土器が加わる。

壺形土器Ⅰ類

第8図4・6～9、第9図2～8、第10図1～8、第11図1～8、第12図1～3の32個体を図示した。I類の中でもそれぞれに特徴があり、器形の上で、A、胴部が張り口縁部がやや内傾するもの、B、胴部がはらずに底部にいたるもの二つに小別することができる。

I類A、第8図8、第9図2・6・8、第10図2～4・7・8の9個体がある。第8図8は口径21.4cm、器高25.3cm、底径9.3cm。口縁直下に幅広い刻目突帯Bをめぐらす。外面は縱方向の条痕で調整し、その上にヘラ状工具で割り状のナデを加える。内面は丁寧なナデ調整、外面胴上部にススが付着。第9図2は口縁部破片、刻目突帯Aをめぐらす。6は口径20.7cm、胴下半部以下を失う。外面の調整は板ナデで上半部は横方向、下半部は斜方向である。外面にススが付着。刻目突帯Aをめぐらす。内面は条痕調整した後、ナデ調整。内面下半に炭化物付着。8は口径22.5cm、器高26.6cm、底径9.3cm。底部には二次的に2.6cmの孔を開ける。コシキに転用したものである。外面の調整は下半部が縱方向であるが器面が粗で、表面が剥落し詳細は不明。上半部は横のナデ調整。ススが付着する。内面は丁寧なナデで仕上げる。刻目突帯Aをめぐらす。第10図2は口径20.8cm、胴下半～底部を失う。外面の調整は不定方向の板ナデ、スス

が付着。内面は器面が荒れているために詳細不明。たぶんナデ調整か、口縁部に刻目突帯Aをめぐらす。3は口径21.2cm、器高24.4cm、底部径7.5cm。内外面の調整はヨコナデ、刻目突帯Bをめぐらす。4は復原口径23.7cm。外面調整は横方向の板ナデ。内面は横方向の貝殻条痕の上をナデ調整している。刻目突帯Aをめぐらす。7は復原口径15.4cm。外面の調整は横方向の貝殻条痕の後、ナデ調整内面は丁寧なナデ調整。刻目突帯Aをめぐらす。8は復原口径18.2cm。外面は横方向の貝殻条痕を施した後、一部ナデ調整。内面も外面同様である。刻目突帯Aをめぐらす。

I類B 第8図4・6・7・9、第9図3~5・7・9、第10図1・5・6、第11図1~8、第12図1~3の23個体がある。第8図4は小型で口径14.2cm、器高10.7cm、底部径7cmで、底部は脚台状をなす。内外面共に磨滅し、調整痕は不明瞭であるが、横方向の寧なナデ調整と思われる。刻目突帯Bをめぐらす。6は口径24.2cm。胴下半部~底部を失う。外面は横方向の板ナデ調整、ススが付着する。内面は板ナデの後ナデによる調整。口縁部に刻目突帯Aをめぐらす。7は小型品で口径16.7cm、器高16.2cm、底部径6.4cm。底部が厚く、外見では脚台状に見える。外面の調整は横、縱の貝殻条痕で胴上半部にススが付着する。内面はナデ調整、刻目突帯Aをめぐらす。9は口径17cm、胴下半~底部を欠く。外面は縱方向の板ナデ後、丁寧にナデ消す。内面は横方向の貝殻条痕後、板ナデによって消している。刻目突帯Bをめぐらす。第9図3~5は口縁部小破片で、3・4は刻目突帯B、5は刻目突帯Aもめぐらす。7は口径18.1cm、胴下半~底部を失う。外面は板ナデ調整。内面は丁寧な横ナデ調整。口縁部に指圧痕が残る。口縁部に刻目突帯Aをめぐらす。9は口径19.6cm、外面はケズリに近い板ナデ調整、突帯下には刻目の延長が残る。胴上半にスス付着。内面は指圧調整後に板ナデを施し、さらにナデ仕上げ。刻目突帯Bをめぐらす。第10図1は口径20.7cm。胴下半部~底部を失う。外面は横方向のヘラナデ調整・内面は横方向の条痕調整。口縁部に刻目突帯Bをめぐらす。5は口縁部破片、外面は横方向の板ナデ調整、ススが付着する。内面は板ナデ後、ナデ調整。刻目突帯Bをめぐらす。6は口縁部破片。復原口径19.6cm・外面は板ナデ調整。下半部は二次的加熱によって剥離がおこっている。外面にスス付着。内面はナデ調整、炭化物が付着する。口縁部に刻目突帯Bをめぐらす。第11図1は口径18.3cm、器高21.7cm、底部径7cm。底部端が極端に外に張り出する特徴がある。胴下半部は下から上へかきあげた縱方向の貝殻条痕で調整し、上半部はナデ消す。内面は横方向の貝殻条痕を施した後、横ナデ調整で丁寧に消している。口縁部に刻目突帯Bをめぐらす。2は口径21.6cm、底部を失う。推定器高22cm前後。外面は板ナデ調整。内面は下半部に板ナデが残り、胴部は横方向の板ナデ、口縁部近くに指圧痕が残る。口縁部に刻目突帯Aをめぐらす。3は口径24.9cm、胴下半~底部を失う。外面は棒状工具による縱位のナデ調整。ススが付着する。内面はナデ調整。刻目突帯Aをめぐらす。4~8は口縁部破片。4は復原口径15.6cm。外面が横方向の貝殻条痕、内面は口縁部に指圧痕後、ナデ調整。5は復原

口径23.5cm。外面はヘラによる削り状の荒い横ナデ。内面は横方向の板ナデ調整。外面にスス付着。6は外面横方向の貝殻条痕、内面は横方向の板ナデ調整。7は復原口径29cm。外面は横方向のケズリ状の板ナデ、内面はヨコナデ調整。8は外面が不定方向の貝殻条痕。内面はナデ調整。4・5は刻目突帯A、6～8は刻目突帯Bをめぐらす。第12図1は口径22.3cm、胴下半～底部を失う。外面は斜方向のヘラナデ、内面は斜～横方向の貝殻条痕調整。口縁に刻目突帯Bをめぐらす。2は口径23.3cm、胴下半～底部を失う。外面は上半と下半が異方向の横ナデ調整で、ススが付着する。内面は横方向の板ナデ調整であるが刷毛目状をなす。下半部に炭化物付着。口縁部に刻目突帯Bをめぐらす。3は口径22.5cm、推定器高24.5cm。外面は右→左の斜方向の貝殻条痕調整、下半部は二次加熱のため器面が剥離する。ススの付着が著しい。内面は横方向の丁寧なナデ。口縁部に刻目突帯Bをめぐらす。

變形土器Ⅱ類

第8図3・5、第9図1、第12図5の4点を図示した。出土土器の中で占める割合はきわめて低い。第8図3は底部と同一個体と考えられる小型品である。復原口径14cm、推定器高10.4cm、底径43cm、外面は横方向の板ナデ後、ナデ調整。内面は縦方向の指ナデ調整。口縁はわずかに外反する。端部に刻目を施す。板付I式とは異なる。5は口縁部破片。口縁がわずかに外反し、端部下半に刻目を入れる。外面は縦方向のヘラナデ、内面は口縁部指圧後、ナデ調整を施す。第9図1は外面がナデ調整、内面は指圧後、ナデ調整。口縁部がわずかに外反し、端部下半に刻目を施す。第12図5は内外面共にヘラナデ調整。口縁は直口し、口端部下半に刻目を施す。

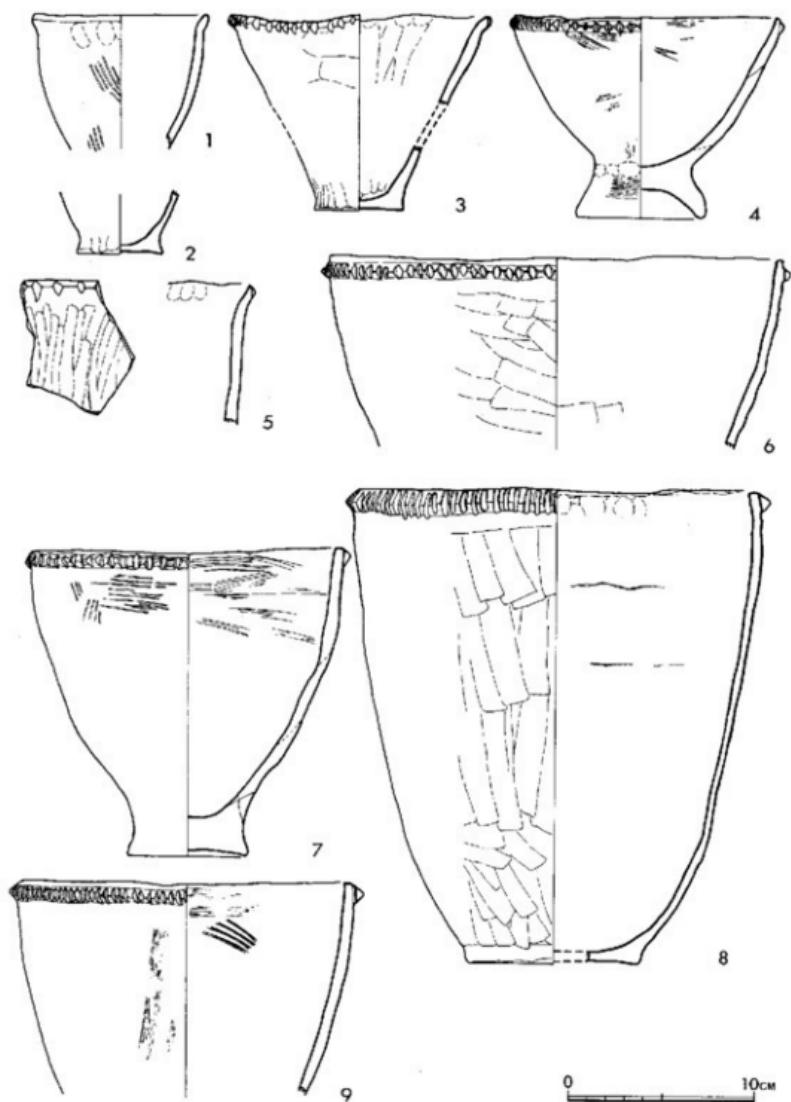
變形土器Ⅲ類

第8図1の小型土器1点を図示した。この土器の構成比は低いが、この他に大型品、小型品が10数点存在する。口径9.4cm、口縁部がわずかに外反する。口縁部の内外面に指圧痕が残る。外面は縦位の刷毛目状の調整、内面は縦位の板ナデ調整である。

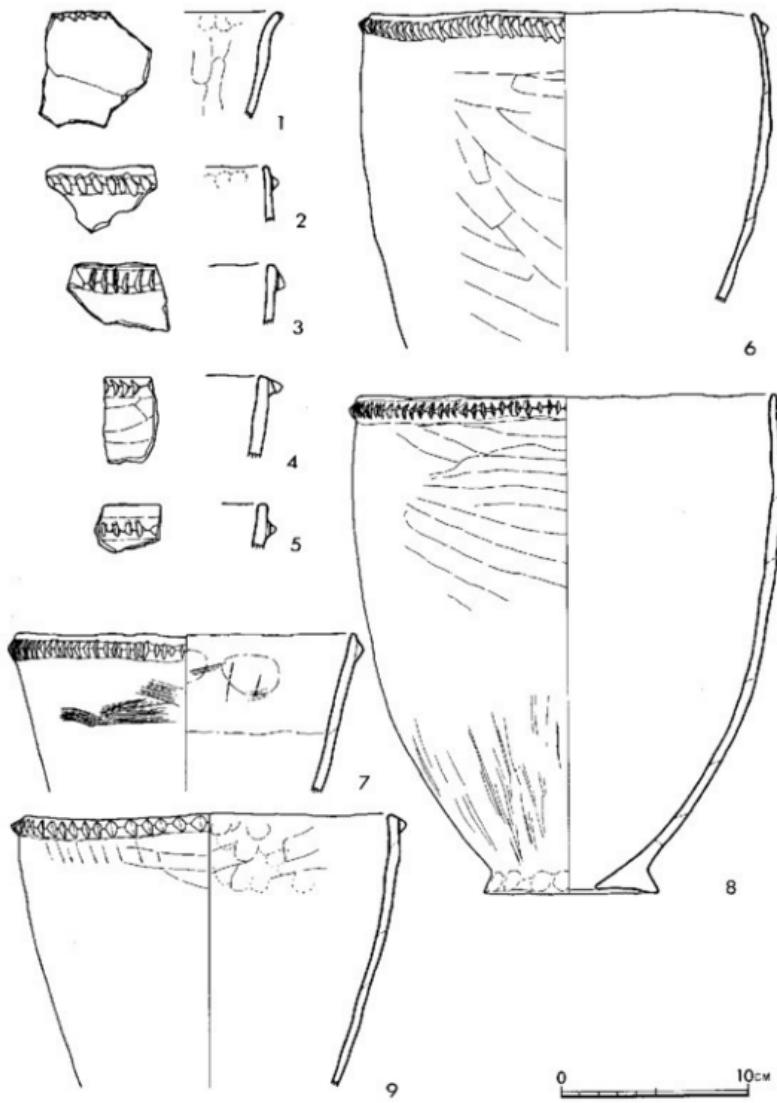
變形土器Ⅳ類

第12図4・6～8、第13図1～5、第14図1～3の12点を図示した。I類に比較し、その構成比は低い。胴上半の屈曲が強いものAとゆるやかなものB、口縁部の突帯のないものCに小別できる。

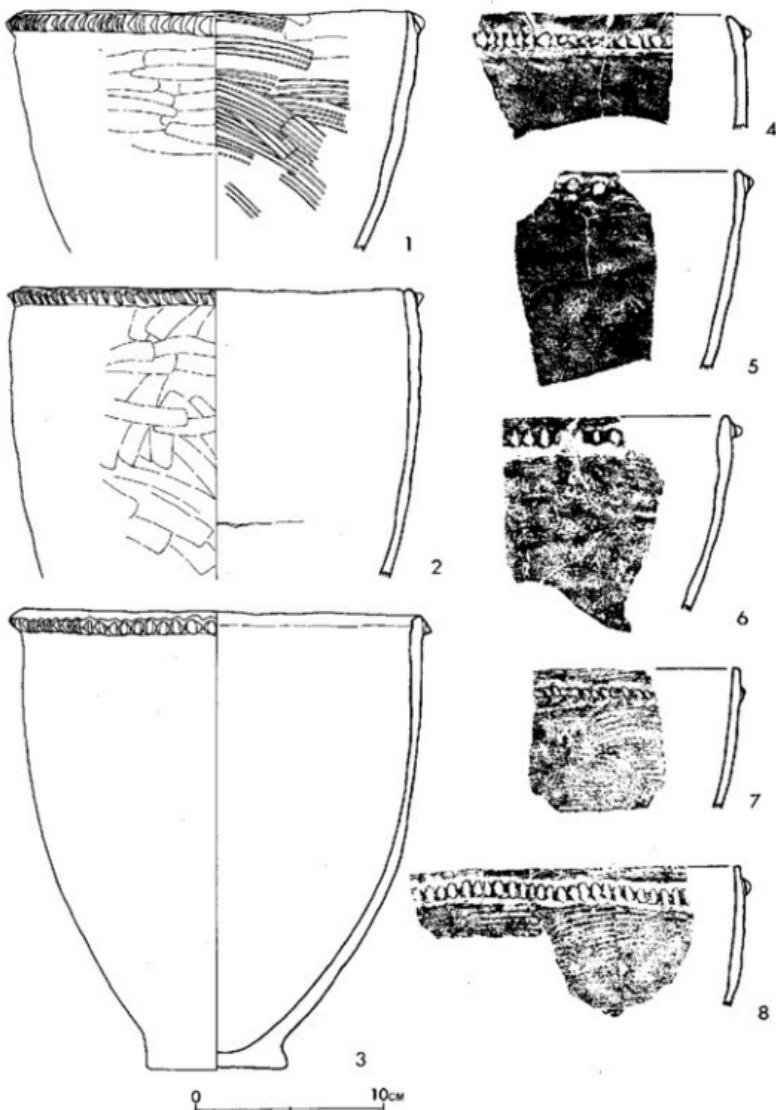
IV類A 第13図3、第14図2・3の3点。第13図3は大型品の破片である。内外面共に横方向のナデ調整。口縁部の刻目突帯はAである。第14図2は口径21cm、胴下半～底部を欠失する。外面の屈曲部下半は粗い横ナデ、上半部は丁寧な横ナデ調整、内面は横方向の板ナデで屈曲部の接合部は指で押さえている。屈曲部径24.2cm。口縁部の突帯はBである。3は口径27.8cm、屈曲部径35.4cm、胴下半部を欠失するが、推定器高29.6cm、底部径11.3cm。外面の屈曲部下半は横方向のヘラ削り状の調整、屈曲部上半は横ナデ、内面は接合部を指で押さえた後、横ナデ



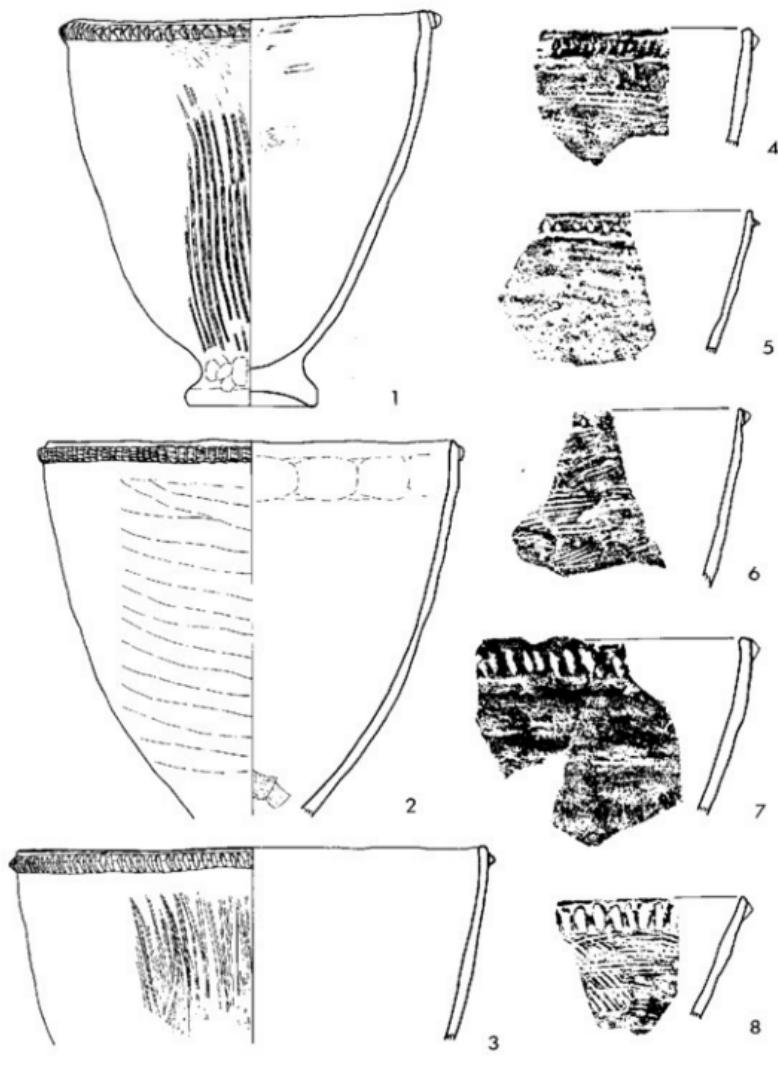
第8図 出土土器実測図(1)



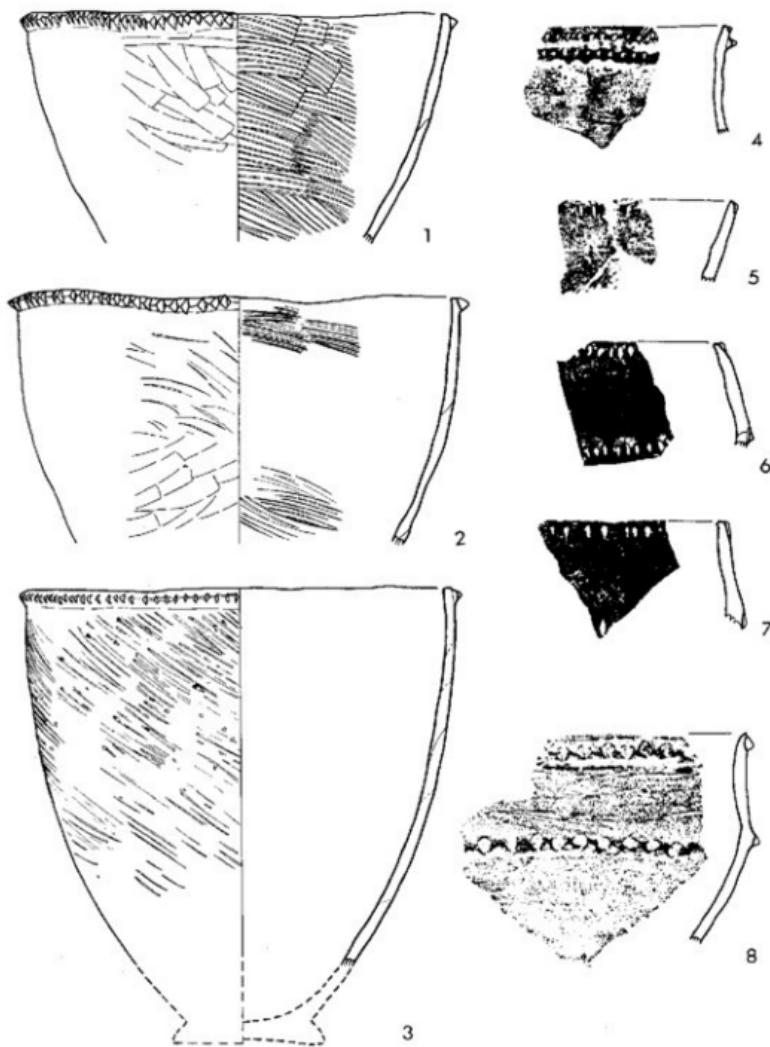
第9図 出土土器実測図(2)



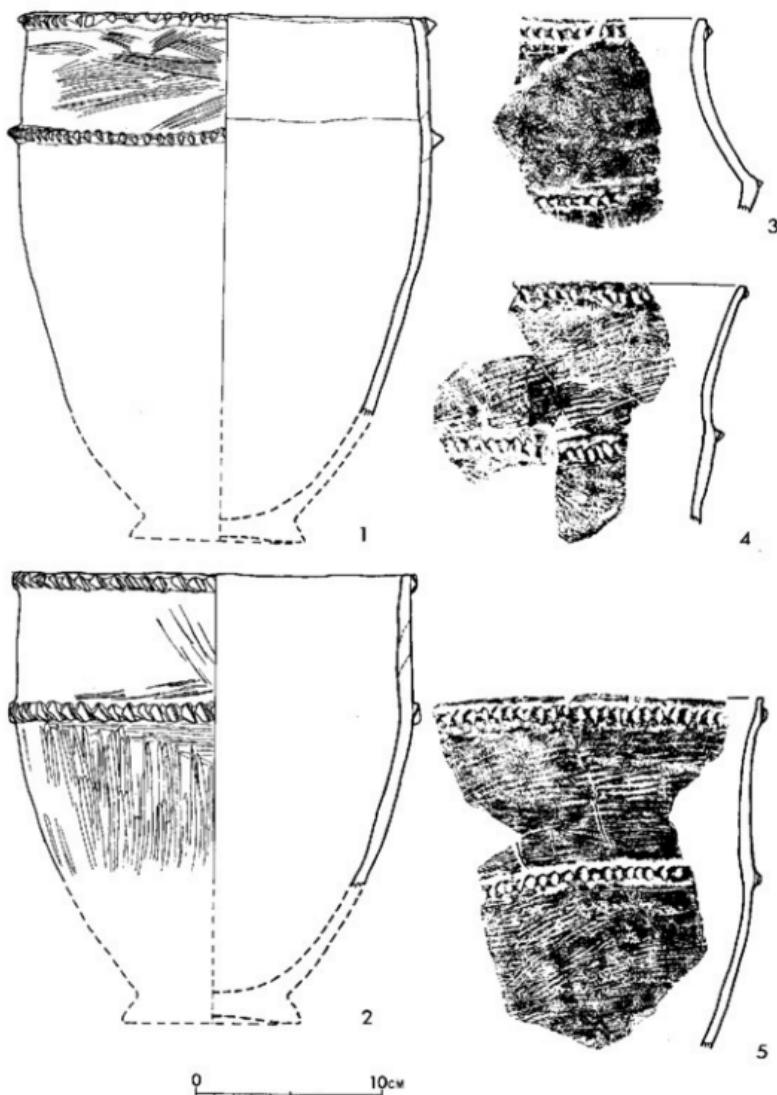
第10図 出土土器実測図(3)



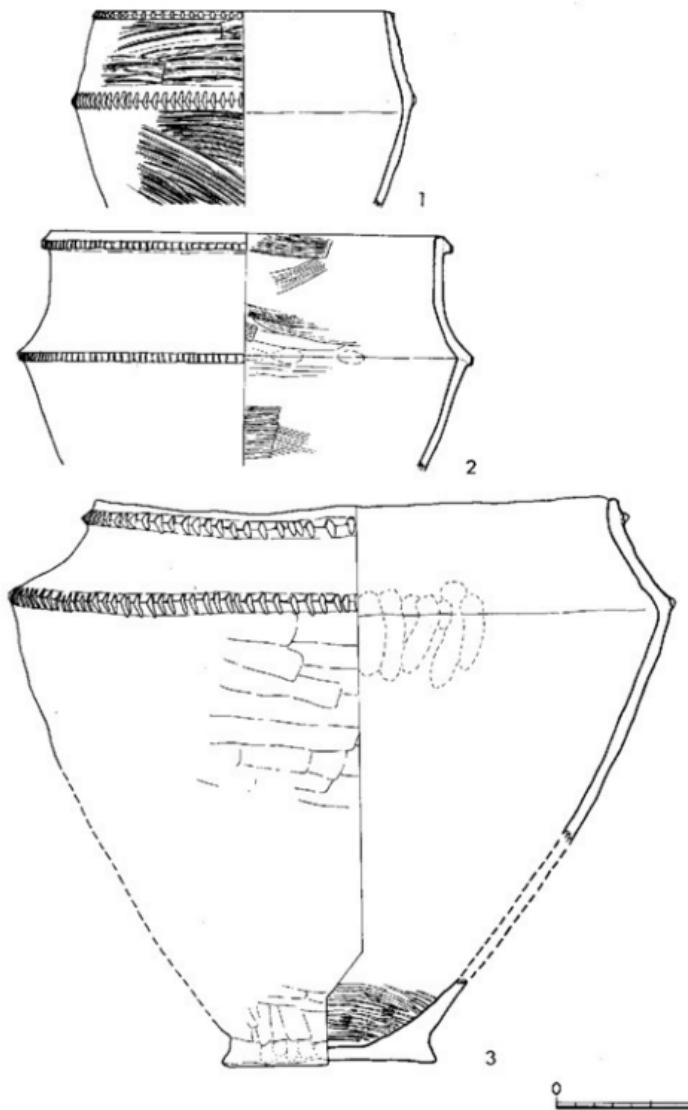
第11図 出土土器実測図(4)



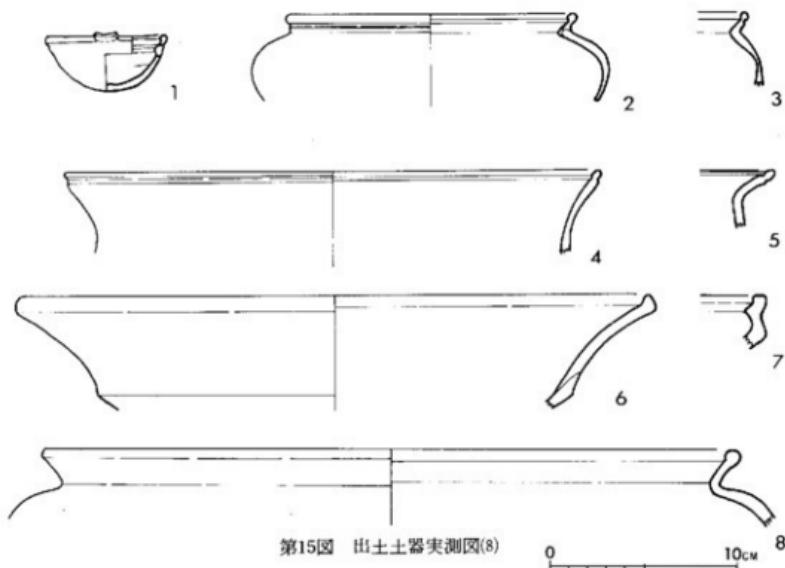
第12図 出土土器実測図(5)



第13図 出土土器実測図(6)



第14図 出土土器実測図(7)

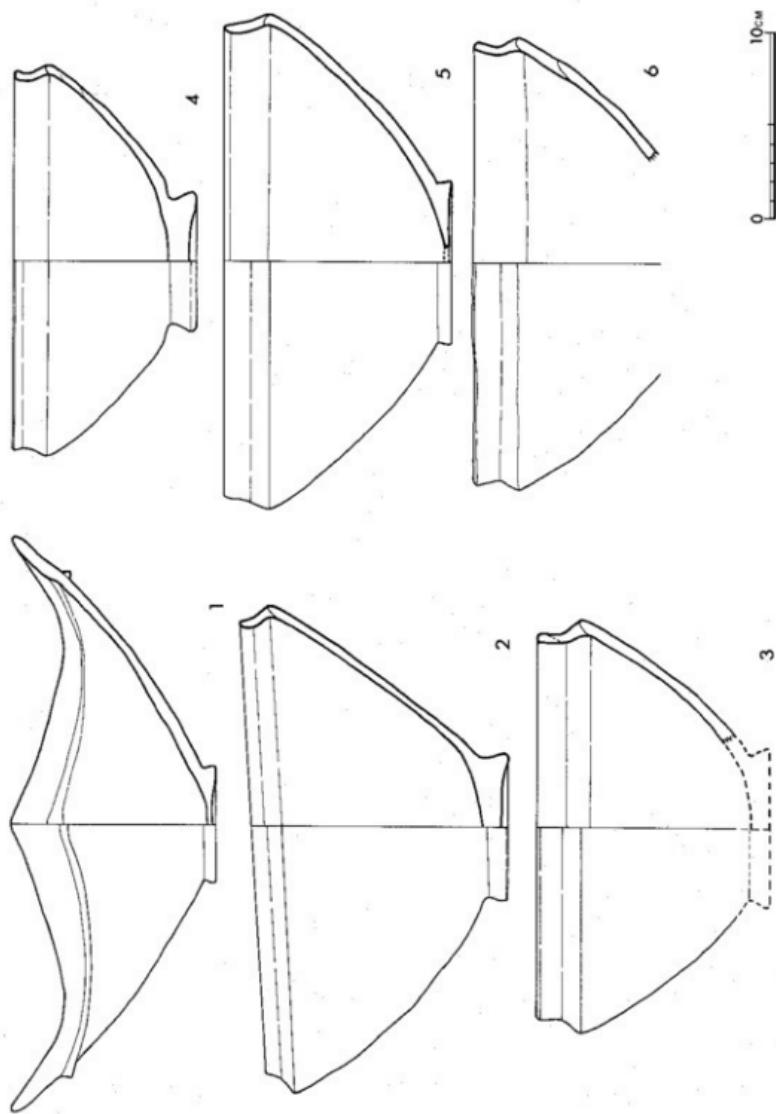


調整、底部は横方向の条痕が残る。

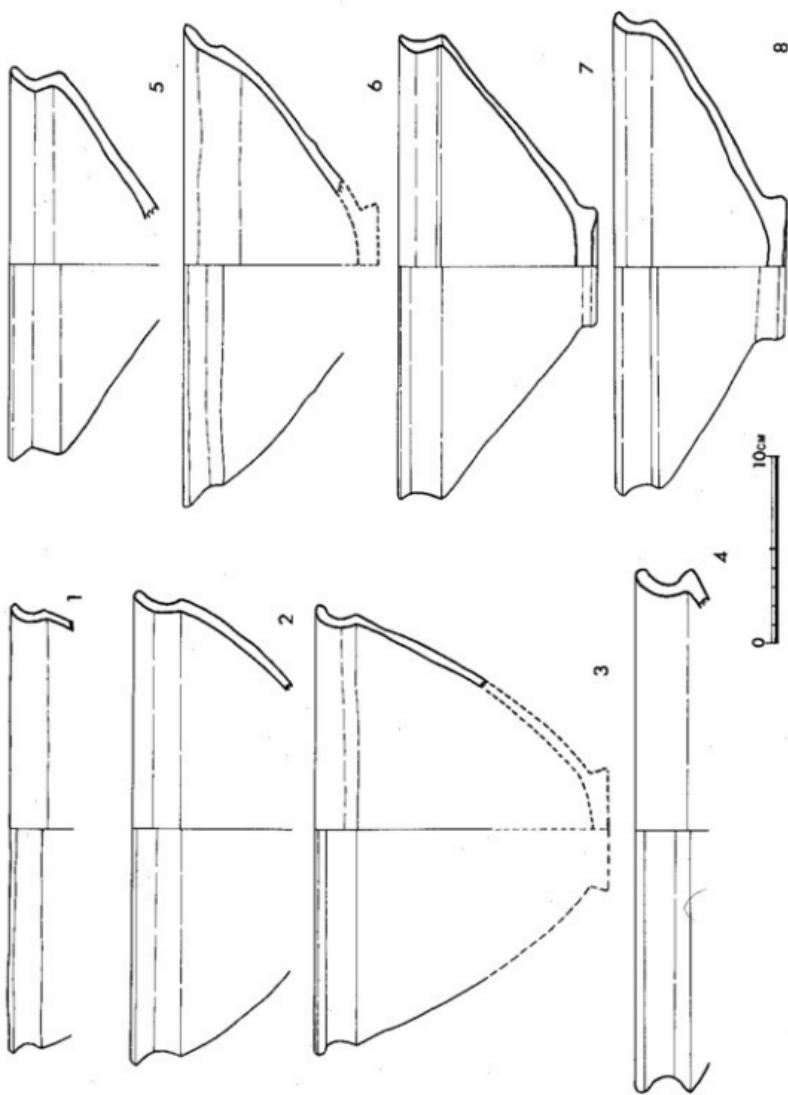
IV類B 第12図4・8、第13図1・2・4・5、第14図1の7点。第12図4は刻目突帯Aをめぐらし、口縁端部にも刻目を施す。外面は板ナデ、内面はナデ調整。8は復原口径19.2cm、屈曲部径21cm、外面は横方向の板ナデ調整を施し、スヌが付着する。内面は横方向の貝殻条痕の上をかるくナデ調整している。口縁の突帯はBである。第13図1・2は胴が張り、屈曲部はほとんどみない。口径20.4cm、推定器高28cm、外面の下の突帯以下は粗いナデ調整、上半は板ナデ、内面はナデ調整、内底部に炭化物の付着がある。口縁部の突帯はBである。2は口径20.4cm、推定器高24cm、外面の屈曲部以下は縦方向のヘラナデ、上半は横方向の条痕を施した後、ナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。外面にスヌ付着、口縁部の突帯はBである。4・5は屈曲部より口縁径が大きい。4は外面の下の突帯以下は条痕を施した後、ナデ調整。上半部は横方向の条痕後、一部をナデ調整する。内面は丁寧な横ナデ調整、口縁部の突帯はBである。5は復原口径22.1cm、外面は横方向の貝殻条痕を施した後、一部ナデ消す。内面は丁寧なナデ調整。口縁部突帯はAである。第14図1は小型品で口径15.6cm、屈曲部径18.3cm、外面は横方向の貝殻条痕、内面は丁寧な横ナデ調整。口縁部の突帯はBである。

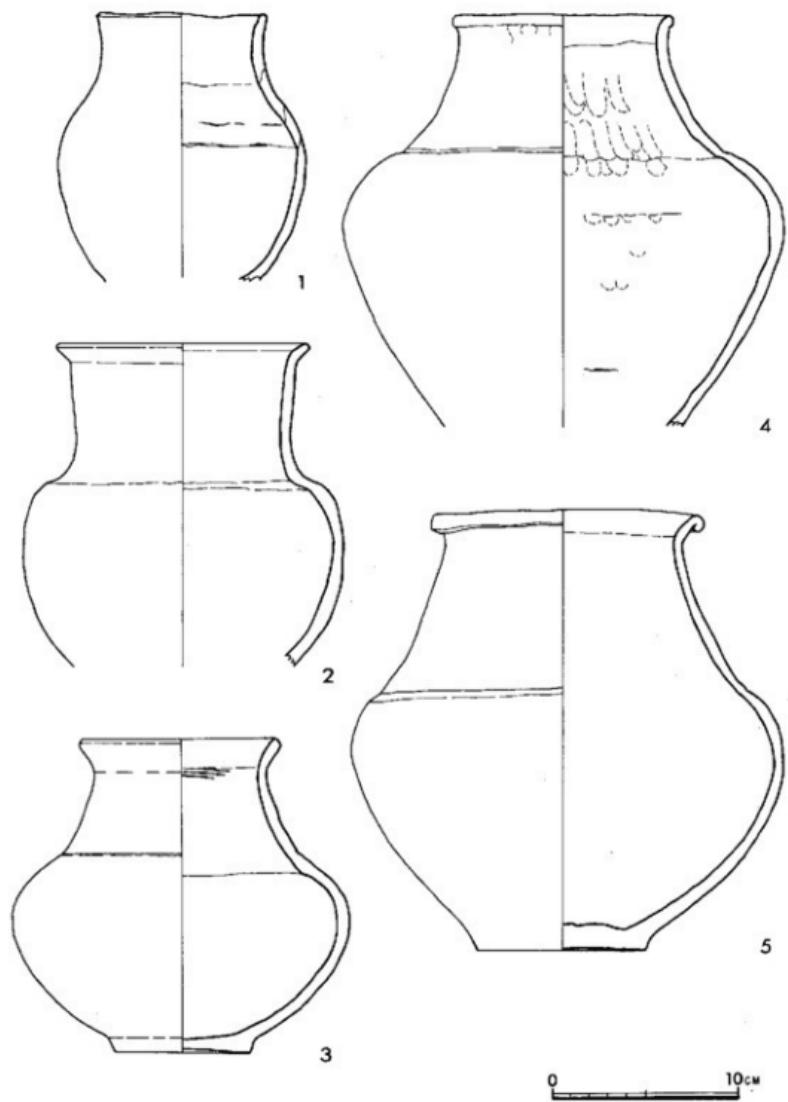
IV類C 第12図6・7の2点、いずれも口縁破片、6は外面がヘラナデ、内面が指圧後ナデ調整。7は外面に縦位の貝殻条痕を施した後、ナデ調整。内面はナデ調整。

第16圖 出土土器實測圖(9)

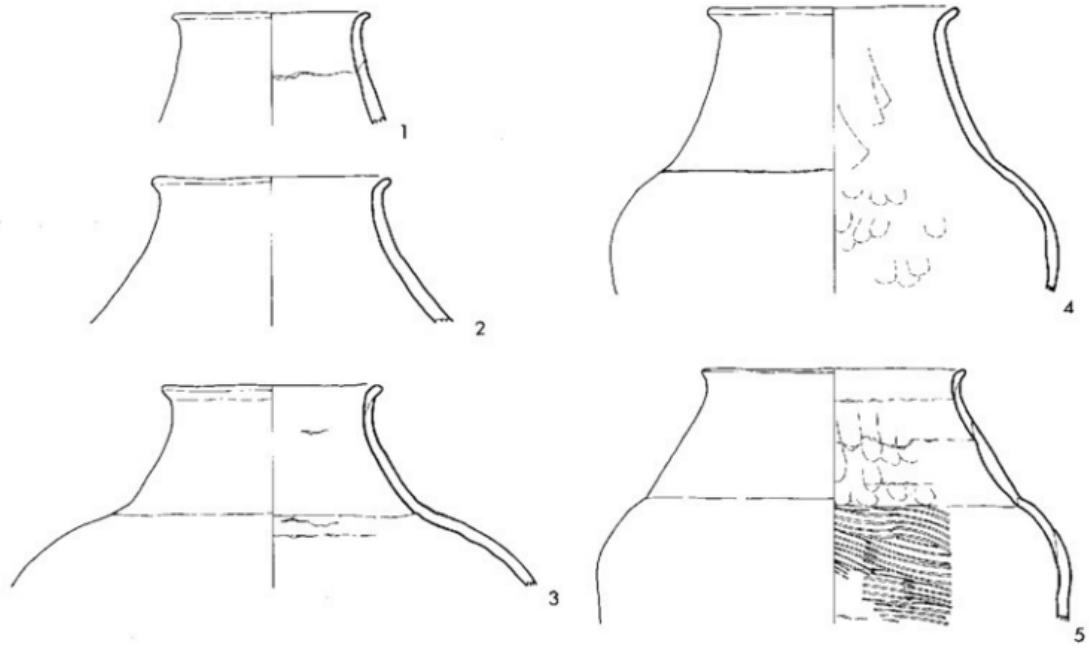


第17圖 出土器物測量圖(00)



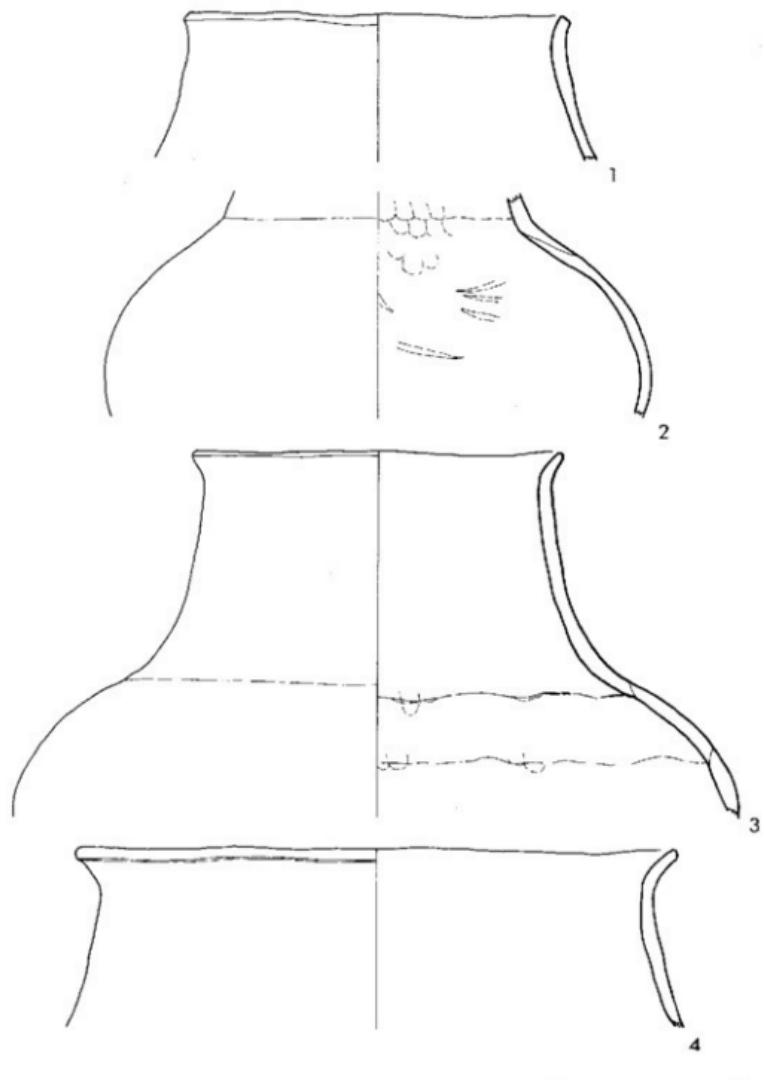


第18図 出土土器実測図(1)



0 10cm

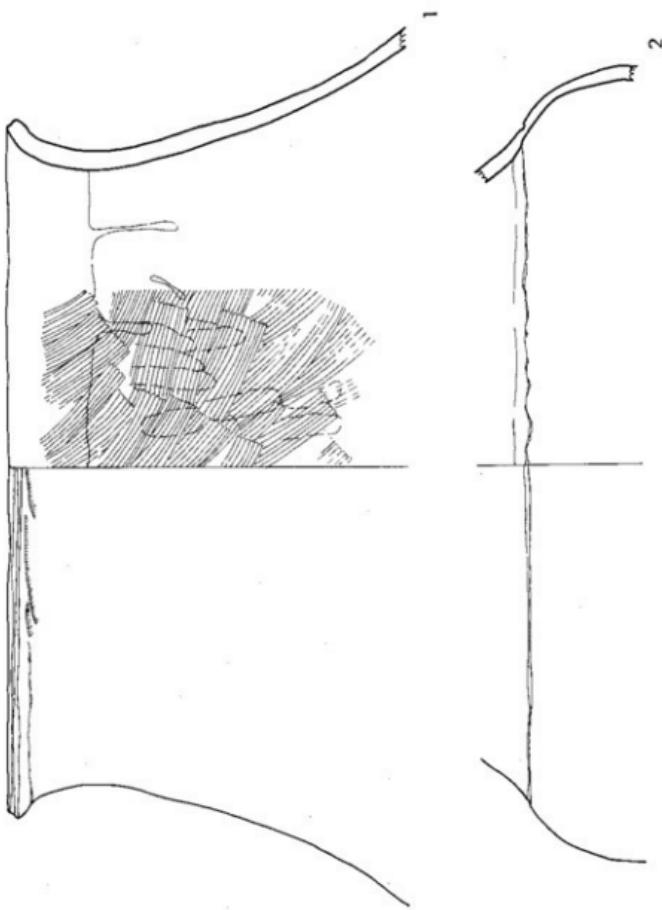
第19図 出土土器実測図(12)

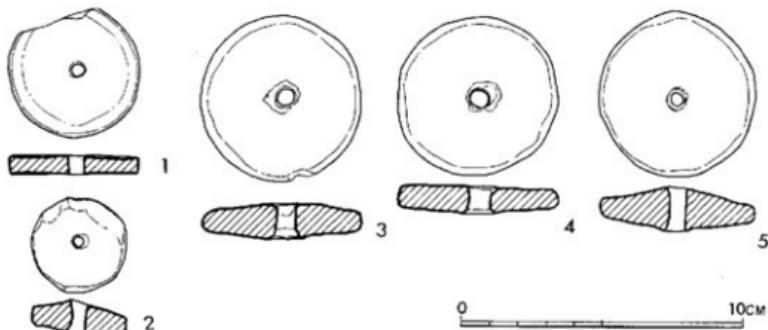


第20図 出土土器実測図(1)

10cm
0

第21圖 出土土器實測圖14





第22図 紡錘車実測図

鉢形土器 I・II

鉢形土器（第15図～17図）は22点を図示した。第15図1～8の土器は特徴から古式のものと考えることができる土器であるが、口縁の形状あるいは肩部の張りがなくなり、最大径が胴中央に移行する点からみて、時期的に今後検討を加える必要があるものである。本遺跡では突帯文土器との層位の分離はできていない。第16図1は平面形が方形をなす浅鉢形土器で他に3個体存在する。他の土器は突帯文土器に共存する浅鉢、鉢形土器であるが、口縁部にそれぞれ特徴をもつていて、今後さらに検討を加えて詳細に述べたいと思う。

壺形土器 I～III類

壺形土器（第18図～21図）は16点を図示した。第18図1～3はI類、第18図4・5、第19図はII類、第20・21図はIII類に分けることができる。第18図1は口縁部が直口し古手であるが場所によって大きく外反する部分もある。2は特異な形状を示す。5の壺にみられる口縁部の折り返しは他に数例存在し、注意される。壺の大部分は丹塗り磨研である。その他に写真（図版12）に示したが、朝鮮無文土器と考えられる資料があるが、今回は充分な検討を加えなかったので後の再報告にゆづいたいと思う。以上のお他、高壺形土器の脚部が数点ある。（山崎純男）

5 土製品（第22図）

土製品には紡錘車と土鍤があるが、土鍤は紙面の都合上割り切った。紡錘車は6点あり図示したのは5点である。1は径4.6cm、厚さ0.7cm、孔径0.45cm、重さ17.3g + σ、2は径3.3cm、孔径0.37cm、厚さ0.8～1.3cm、重さ12.75g、3は径5.7cm、孔径0.6cm、厚さ0.8～1.3cm、重さ38.5g、4は径5.7cm、孔径0.65cm、厚さ1cm、重さ47g、5は径5.6～5.9cm、孔径0.5cm、厚さ0.8～1.6cm、重さ50.5g、図示しなかった1点は径4cm、孔径0.35cm、厚さ1～1.6cm、重さ23.7gである。

（山崎純男）

6 出土石器（第23～28図 表）

本遺跡の調査では、多くの石製の遺物が出土した。これらの石製遺物から自然疎・剝片・削片・石核を除く石製品は86点ある。内訳は、石鎌が34点で最も多く、石鎌未製品4点、石斧類24点、石錐5点、石泡丁3点、打製石鎌（未製品か）1点、磨製石劍2点、石槍1点、石匙1点、石錐1点、片刃礫器2点、磨石2点、砥石6点である。以下簡単に各器種についてふれていくことにする。

石鎌及び未製品（第23・24図1～36・38）

石鎌は前述したように本遺跡で最も多い石器、出土石製品の39%をしめ、未製品を加えると44%をしめている。石鎌のうち磨製石鎌は、硅質泥岩製品の1点で、他は打製石鎌であり、打製石鎌も2点が古銅輝石安山岩製で他は良質の黒曜石製である。磨製石鎌（1）は、残存長10.2cmで、中央に腹線があり、断面形菱形で、両側縁も鋭くなっている。打製石鎌のうち未製品の可能性がある25・30・31を除いた完形品の重さの平均は、1.1gである。傾向としては、0.9g前後、1.2g前後に集中し0.5g前後のもの、2gを越えるものが小量みられる。打製石鎌製作については、4点の未製品（35・36・38）が出土している。その中で36・38など3点は、打点が先端に比べて狭い不定形剝片を素材として、素材打点を尖端部にする意図のもとに、素材の打済を二次加工によって取りざり、素材縁辺に表裏から二次加工を加える方法で三角形に整形していき、素材先端部に抉りを入れる整形方法をとっている。他方35は、素材打点を基部に意識している。ただ35は、表にも記したように、削器の可能性もある。36・38などのような整形方法をとったと考えられる製品としては、8・16・22・25・31などがある。素材打点を基部にもってくるものとしては、3・6・9・13・29・32などがあり、素材打点を横にもってくるものとしては、14・23などがある。なお、5・14の尖端部、2・26・27の左脚は使用による欠損と考えられる。また3・6・12・14・15・16・18・23・31など片脚の一部をつまみ状につくり出しているのがみられるが、これは、この遺跡に石鎌を残した人のくせかもしれない。

石槍（第24図37）

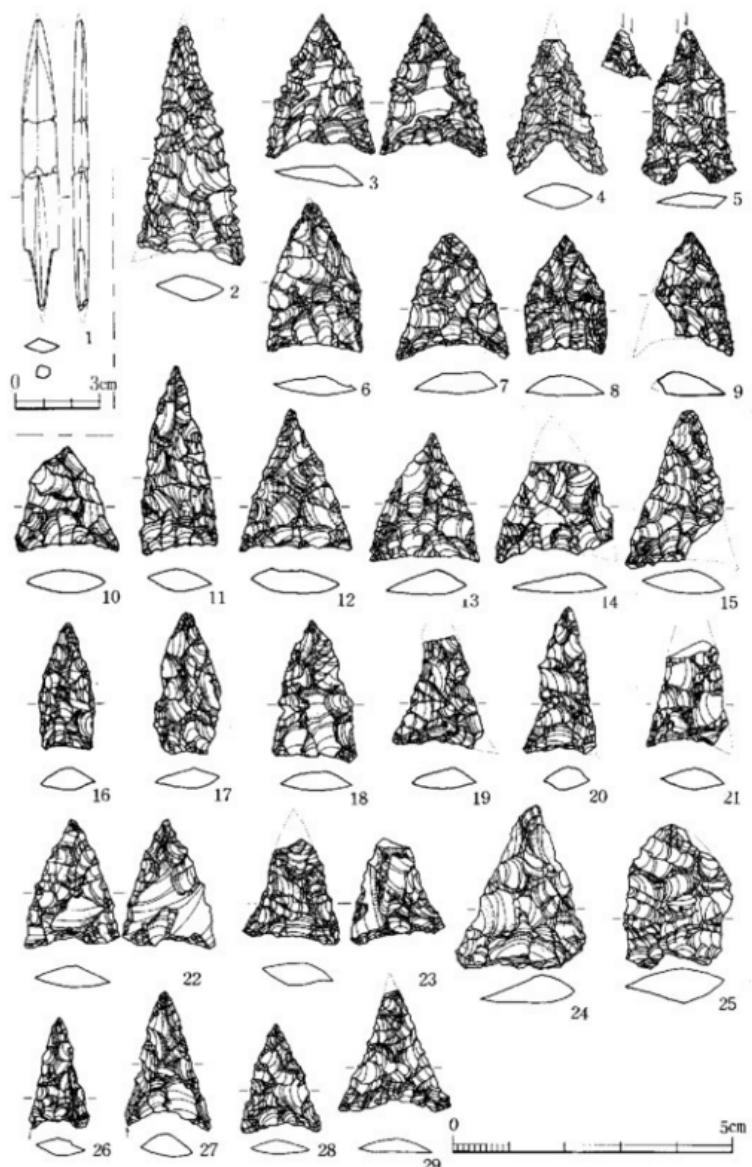
良質の黒曜石製で、継長剝片を素材として、縁辺下半の両側縁に表裏から二次加工を加えた後、素材先端部を尖らすため、表裏から二次加工を加えている。重さが、8.25gであり、磨製石鎌より軽いことから、打製石鎌とすべきものかもしれない。

石錐（第24図39）

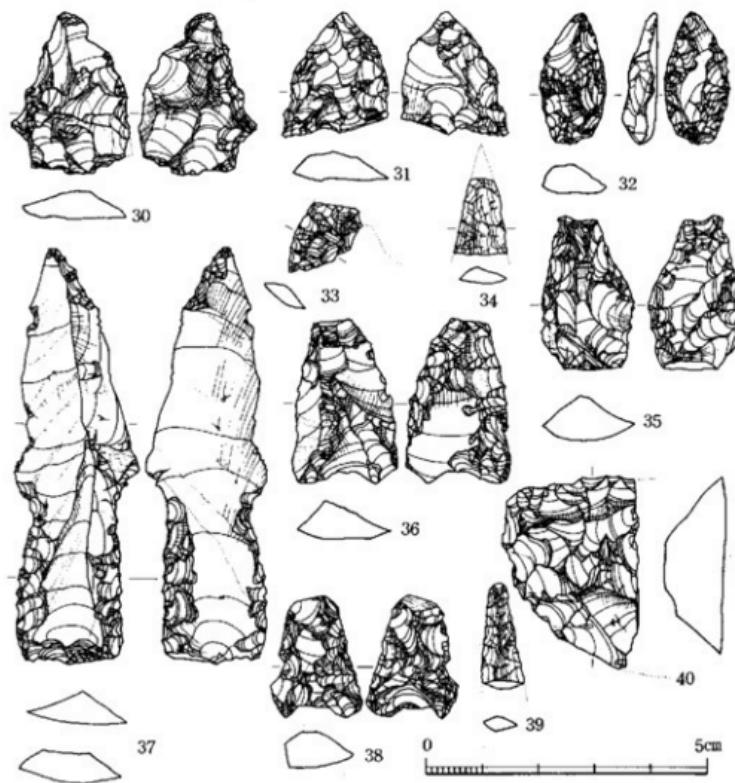
古銅輝石安山岩製で、表裏とも入念な剝離加工によって、断面形菱形の棒状に整形している。先端部が丸く、つぶれていないことから、石鎌の脚とすべきものかもしれない。

石匙（第24図40）

比較的厚い良質の黒曜石製の剝片を素材として、表面に比較的角度のある二次加工を加え、裏面は、平坦剝離に近い二次加工を加えて、鋭い刃部をつくり出している。



第23図 出土石器実測図(1)



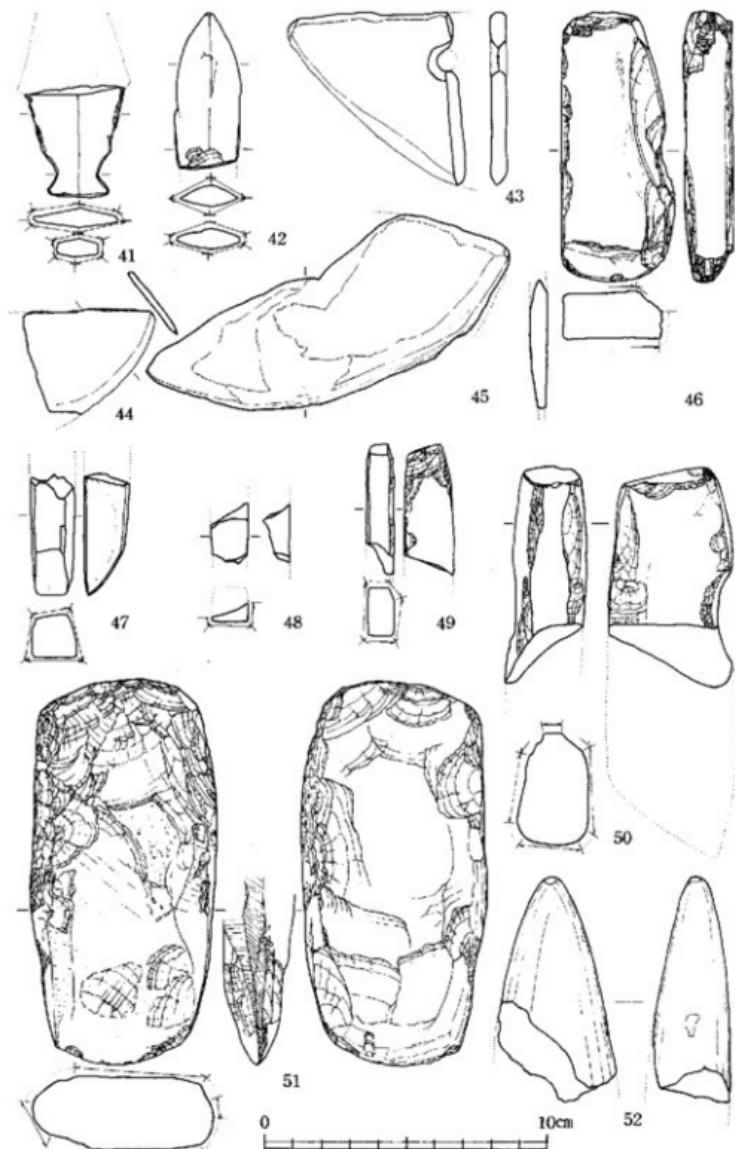
第24図 出土石器実測図(2)

石剣 (第25図41・42)

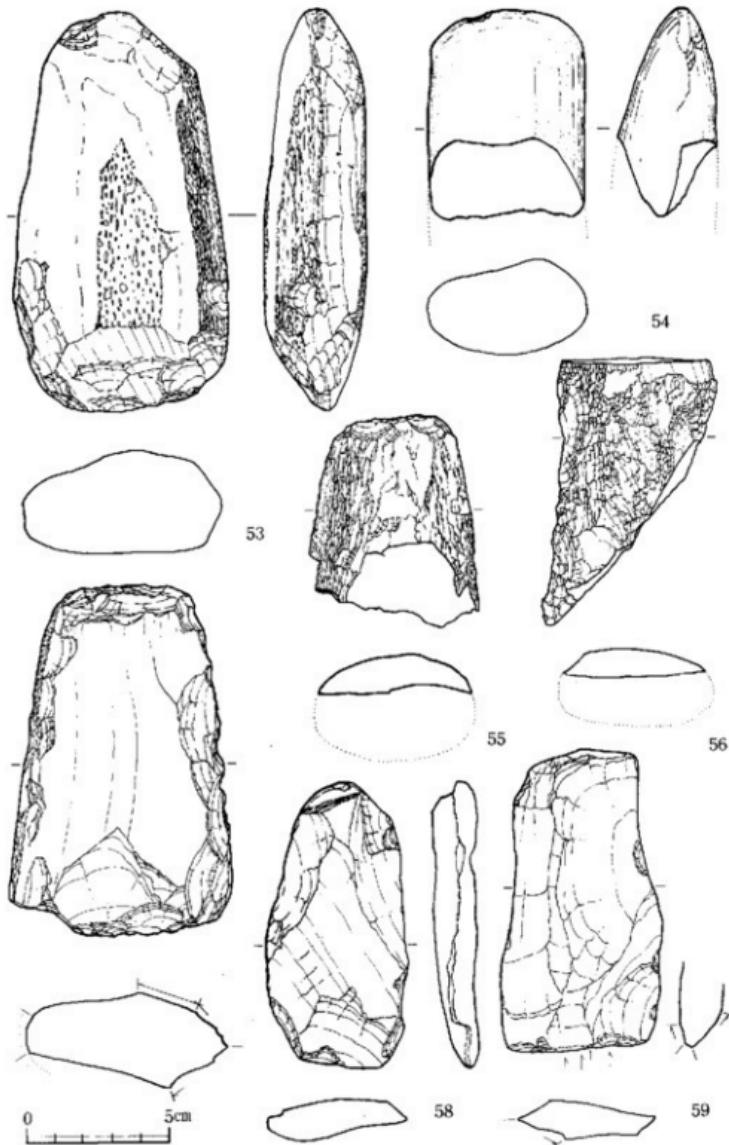
41は、凝灰岩ホルンフェルス製で、研磨によって中央に陵線がはしり、身部は、断面菱形になるように整形し、基部両側縁に抉を入れている。身部から尖端にかけては欠損している。42も研磨によって、中央に陵線がはしり断面形菱形に整形している。身部縁辺の下端は、刃を研磨によって漬している。

石庖丁 (第25図43~45)

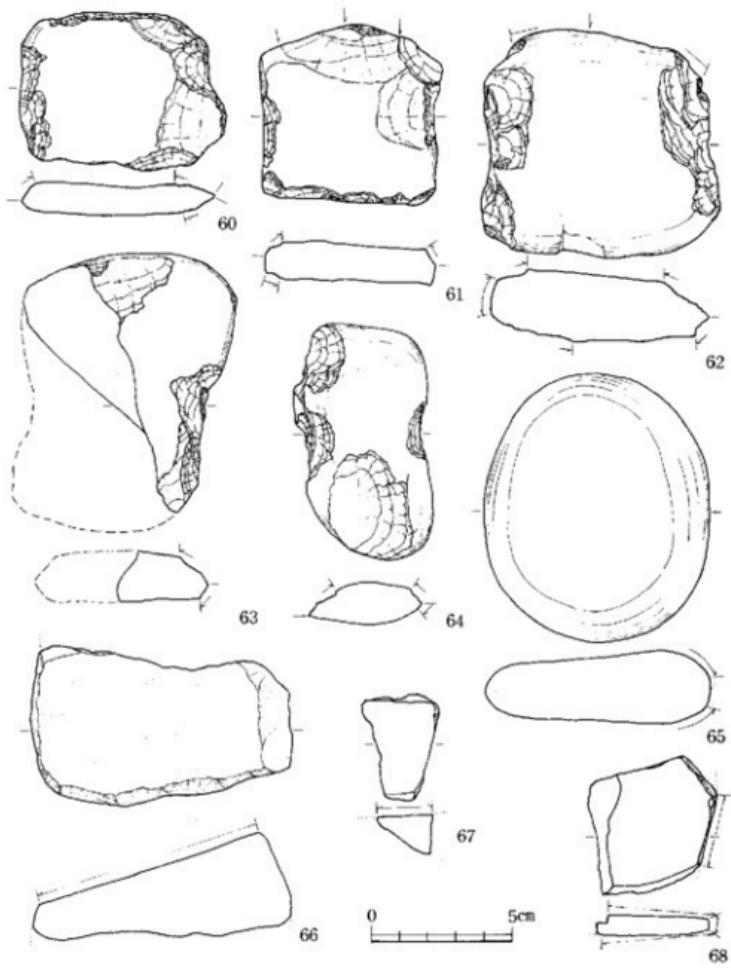
いづれも安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製で、敲打整形後研磨を加えている。43は三角形石庖丁と考えられるが、欠損している。両刃で、穿孔部は、表裏から穿孔している。



第25図 出土石器実測図(3)



第26図 出土石器実測図(4)



第27図 出土石器実測図(5)

No	器種	石材	備考	No	器種	石材	備考
1	薄板石綱	砂質泥岩	重さ9.3g	35	石鏃未製品	黒曜石	重さ3.95g(削器?)
2	打製石綱	黒曜石	重さ2.8g+e(有傷、縫)	36	石鏃未製品	黒曜石	重さ2.15g
3	打製石綱	黒曜石	重さ1.4g(有傷、縫)	37	石 砕	黒曜石	重さ8.25g(打製石綱?)
4	打製石綱	古銅輝石安山岩	重さ1.05g+a(有傷、縫)	38	石鏃未製品	黒曜石	重さ2.2g
5	打製石綱	黒曜石	重さ1.1g	39	石 錐	古銅輝石安山岩	重さ0.45g+a(石錐?)
6	打製石綱	黒曜石	重さ1.2g+a	40	石 錐	黒曜石	
7	打製石綱	黒曜石	重さ1.17g	41	石 刃	褐色岩ホルンフェルス	
8	打製石綱	黒曜石	重さ0.95g	42	石 刃	?	
9	打製石綱	黒曜石	重さ0.83g+a	43	石 刃 丁	安山岩質泥灰岩ホルンフェルス	
10	打製石綱	黒曜石	重さ0.95g	44	石 刃 丁	安山岩質泥灰岩ホルンフェルス	
11	打製石綱	黒曜石	重さ1.06g	45	石 刃 丁	安山岩質泥灰岩ホルンフェルス	
12	打製石綱	黒曜石	重さ1.13g	46	扁平片刃石斧	硅質シルト岩	重さ139.8g
13	打製石綱	黒曜石	重さ1.25g	47	柱状片刃石斧	硬砂岩	
14	打製石綱	黒曜石	重さ0.95g+a	48	柱状片刃石斧	シルト岩	
15	打製石綱	黒曜石	重さ1.25g+a	49	柱状片刃石斧	シルト岩	
16	打製石綱	黒曜石	重さ0.68g	50	块入片刃石斧	硅質シルト岩	
17	打製石綱	黒曜石	重さ0.95g	51	始刃石斧	シルト岩	重さ392.05g
18	打製石綱	黒曜石	重さ0.95g	52	始刃石斧	?	
19	打製石綱	黒曜石	重さ0.95g+a	53	始刃石斧	玄武岩	重さ595.5g
20	打製石綱	黒曜石	重さ0.88g	54	始刃石斧	硬砂岩	
21	打製石綱	黒曜石	重さ0.99g+a	55	始刃石斧	玄武岩	
22	打製石綱	黒曜石	重さ0.87g	56	始刃石斧	玄武岩	
23	打製石綱	黒曜石	重さ0.92g+a	57	始刃石斧	東山岩(玄武岩)	重さ466.7g(未製?)
24	打製石綱	黒曜石	重さ2.17g	58	打製石斧	安山岩(玄武岩)	重さ105.85g
25	打製石綱	黒曜石	重さ2.57g(未製品か)	59	打製石斧	安山岩(玄武岩)	重さ130.7g
26	打製石綱	黒曜石	重さ0.42g	60	石 錐	安山岩	重さ99.88g
27	打製石綱	黒曜石	重さ0.82g	61	石 錐	安山岩	重さ122.68g
28	打製石綱	黒曜石	重さ0.48g	62	石 錐	安山岩	重さ242.8g
29	打製石綱	黒曜石	重さ0.61g	63	石 錐	安山岩	重さ142.35g+a
30	打製石綱	黒曜石	重さ2.4g(未製品か)	64	石 錐	安山岩	重さ94.7g
31	打製石綱	黒曜石	重さ1.6g(未製品か)	65	磨 石	?	重さ317.65g
32	打製石綱	黒曜石	重さ1.35g	66	磨 石	砂 岩	
33	打製石綱	黒曜石	重さ0.49g+a	67	磨 石	砂 岩	
34	打製石綱	古銅輝石安山岩	重さ0.42g+a	68	磨 石	砂 岩	

出土石器一覧表

石斧類 (第25・26図46~59)

石斧類は、石製品の30%（鍛器2点を含めて）で、石鎚の次に多い器種である。内訳は、磨製の始刃石斧15点、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧各3点、块入片刃石斧1点、打製石斧2点、片刃石器2点である。

平片刃石斧 (第25図46)

硅質シルト岩製で、剥離加工、敲打によって長方形に整形したあと、剥離加工と研磨によって、40°前後の刃部のつくり出しを試みている。体部の表裏、左側縁は、研磨を加えている。未製品か。

柱状片刃石斧 (第25図47~49) 47が硬砂岩製で、他はシルト岩製である。いずれも剥離加工を加えた後断面形方形の柱状に整形している。47の刃部の角度は35°である。

蛤刃石斧 (51~57) 51がシルト岩製で、53・55・56が玄武岩製、54が硬砂岩製、57が安山岩製である。いざれも、敲打整形後、研磨を加えている。51は、剥離加工、敲打によって、断面形橢円形に整形したあと、両刃の刃部を中心に研磨を加えている。刃部は40°の角度をもっている。53も、51と同様の加工方法で整形したあと、研磨を加えている。刃部の角度は60°である。57は剥離加工によって、右側縁を整形し、敲打によって左側縁を整形し、体部に研磨を加えている。刃部欠損後、折れた部分に表裏から剥離加工を加え刃部をつくり出しており、打製石斧的な使い方を行なったと考えられる。

打製石斧 (58・59) 2点とも安山岩製の縦長剝片を素材として、剥離加工によって、長方形状に整形し、片方に刃部をつくり出している。

石鎌 (60~64) いざれも安山岩製の扁平な河原礫を素材として、両側縁中央部に打ち欠き(剥離加工)により抉入部をつくり出している。60・61・62は方形を意識している。62は、まず、上側縁に表から裏にかけて打ち欠き、片刃鎌器状にしたあと、左右側縁に表裏から打ち欠き抉入部をつくり出している。また62の左抉入部は使用によるものと思われる磨耗痕がみられる。

(山口謙治)

おわりに

有田七田前遺跡の調査は I・II で述べたように台地部分に幅 4 m、長さ約 24~25 m、厚さ 20~30 cm に堆積している包含層の調査にとどまった。土器の分布は川状遺構の埋没後の浅い溝状部を呈する浅い窪みに帶状に集中して検出された。この浅い窪みは一見遺構とも見えられるが、自然堆積の凹凸と考えた方が妥当であろう。包含層から出土した土器の量はコンテナ 15 個分、個体数にして数百個体分あるものと推定される。このように多量の土器が生活の場から遠く離れた所に投棄したと考えるのは不可能であろう。そうすると、調査区東側の削平を受けた部分に生活の場があったものと考えられよう。包含層の下に検出された川状遺構は台地縁部を越る環濠的性格をもつものである可能性があるが、一部分の調査であったので明らかにはできなかつた。また調査区の西側は試掘調査により氾濫原と理解されているが、八女粘土層が高い位置から検出されたり、その直上に黒色粘質土が堆積している部分も認められ、生産の場として考えることも可能ではなかろうか。

出土土器は夜臼式土器を主体とするが、少し時期的に先行する鉢（第 15 図）や壺があり、さらに板付 I 式の壺の小破片も出土している。しかしその量は極めて少く、全体の 1% 以下の量で、土器包含層の 5 層と川状遺構の上層との層位は極めて類似しており、面的に区分するのは困難であったので古い形態の土器類は川埋没時の二次堆積である可能性がある。夜臼式土器と共に小型の壺で朝鮮無文土器と考えられるものも數点出土しており、大陸との深い交流を知ることができる。この土器については土器の項で述べているように再検討を要するので、あえて図示しなかった。土器の内容については前項で詳述されているので少略するが、これらは同一の包含層及び川状遺構からの出土土器であるが、土器の特徴から同一時期として見えるよりも、短い時間内ではあろうが、ある一定の時間幅を考える必要がある。

石器は大陸系石器が量は少いが種類はまとまって出土している。磨製石鎌 1、石剣 2、石庖丁 2、扁平片刃石斧 1、柱状片刃石斧 3、抉入石斧 1 がある。これら大陸系石器と朝鮮無文土器が共存して出土していることは、物として伝播しただけではなく、他の要素を考えることができよう。他に打製石器として黒曜石の石鎌、石槍、石錐、石匙それに安山岩の石鍤がある、石鎌に未製品を多く含むこと、その石鎌に遺跡の特徴を有することは、大陸系石器の存在と併せて考えると、この時期の文化が複雑な様相を呈していることを現わしているものであろう。

最後になったが、諸般の都合で、整理が一部しか終了していない出土遺物の一部しか図示し、報告することができずに、不備な報告書となつたが、機会を改めて整理を進め報告したい。

(松村)

図 版



1. 遺跡遠景



2. 調査区全景



1. 遺物出土状況（B区）



2. 遺物出土状況（B区）



1. 調査区南側土層



2. 1に同じ



1. 遺物出土状況（A区）



2. A区川検出状況



1. A区川検出状況
2. B区川検出状況





11-2



9-8



8-8



10-3



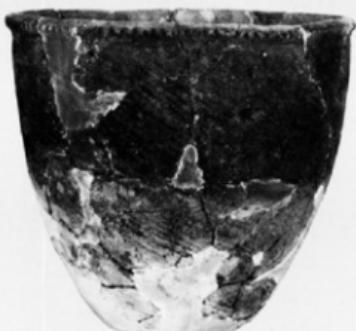
12-2



9-9



11-1



12-3



10-2



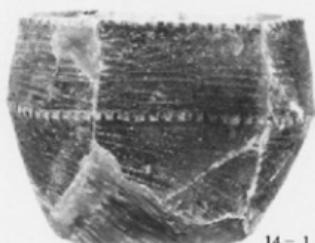
13-1



8-7



14-3



14-1



18-3



8-9



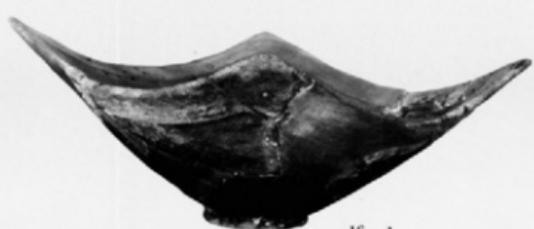
18-5



18-2



20-3



16-1



8-4



16-5



16-2



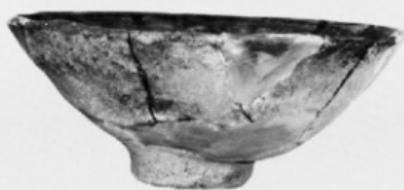
16-4



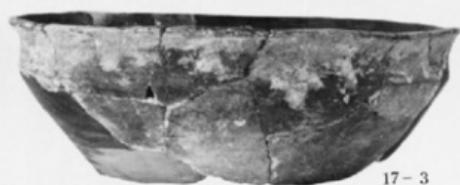
17-7



15- 1



17- 8



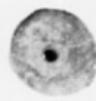
17-3



17-8



2



3



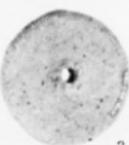
1



4



5



3



41



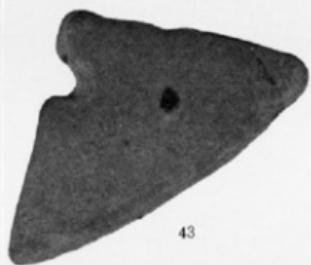
42



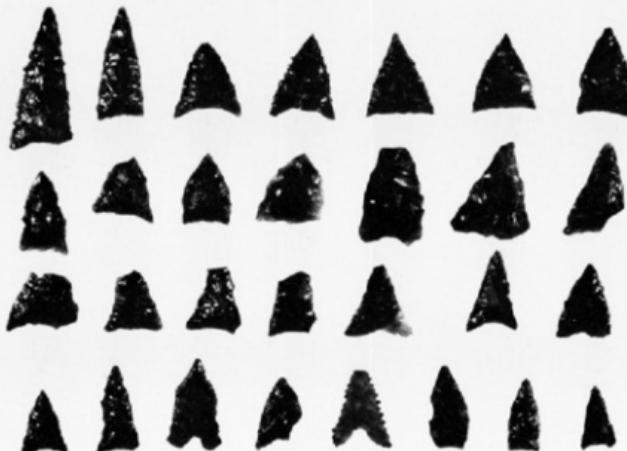
49



47



43





有田七田前遺跡

—有住小学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告第95集

1982年 3月31日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 福博綜合印刷株式会社

福岡市博多区堅粕3丁目16-36

有田七田前遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第95集

一九八三

福岡市教育委員会